

熊谷市籠原裏遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

籠 原 裏 遺 跡

籠原裏古墳群第11号墳



2 0 0 9

埼玉県熊谷市籠原裏遺跡調査会

熊谷市籠原裏遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

かご はら うら い せき
籠 原 裏 遺 跡

かご はら うら こ ふん ぐん だい じゅういち ごう ふん
籠 原 裏 古 墳 群 第 11 号 墳

2 0 0 9

埼玉県熊谷市籠原裏遺跡調査会



第11号墳 墳丘葺石検出状況（西から）



墳丘・周溝検出状況（南から）



石室検出状況（南から）



石室断割り状況（南から）

序

平成17年10月1日、熊谷市、大里町、妻沼町の一市二町が、さらに平成19年2月13日、江南町と合併して、新『熊谷市』が誕生いたしました。

新『熊谷市』は、南北約20km、東西約14kmにわたり、面積は159.88km²、人口は20万人を越えることとなり、県北最大の都市として生まれ変わりました。新市は、関東平野を縦横に流れる荒川と利根川の2大河川が最も近接する流域に位置し、平坦な地形に肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。

こうした自然環境のもと、新市内には先人たちによって多くの文化財が営々と築かれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証であるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

本書は、平成20年に発掘調査を行った、籠原裏遺跡及び籠原裏第11号墳について報告するものであります。本遺跡からは平安時代の住居跡や遺物などが確認されております。また、近年深谷市で発見された古代の役所跡と推測される幡羅遺跡や県内でも最古段階に創建された寺院の1つである熊谷市西別府廃寺、さらには古墳時代後期から平安時代まで長期間にわたって祭祀の行われた西別府祭祀遺跡などといった遺跡群の出現を考える上でも、本遺跡の存在は非常に重要なものといえます。本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され、ご理解ご協力を賜りました森田よね氏、並びに地元関係者には厚くお礼申しあげます。

平成21年3月

熊谷市籠原裏遺跡調査会
教育長 野 原 晃

例 言

- 1 埼玉県熊谷市大字新堀353-1番地他に所在する籠原裏遺跡（埼玉県遺跡番号59-082）及び、籠原裏古墳群（埼玉県遺跡番号59-051-11）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は共同住宅建設に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市籠原裏遺跡調査会が実施した。
- 3 本事業の組織は、第Ⅰ章3のとおりである。
- 4 発掘調査期間は、平成20年5月19日から平成20年6月13日までである。
- 5 発掘調査及び報告書執筆・編集は、熊谷市教育委員会蔵持俊輔が行った。また、熊谷市教育委員会社会教育課の職員の支援を受けた。
- 6 発掘調査及び遺物の写真撮影は、蔵持が行った。
- 7 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会で保管している。
- 8 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関などからご教示、ご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

（敬称略、五十音順）

内田勇樹 菅谷浩之 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

凡 例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

- 1 遺構挿図の縮尺は、次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

調査区全測図… 1 / 400 住居跡・土坑… 1 / 60 遺構断面図… 1 / 60

- 2 遺構挿図中のスクリーントーン等は次のとおりである。



=地山



=石

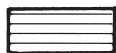
- 3 遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。

- 4 遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

土器・陶磁器・鉄製品… 1 / 4 石製品… 1 / 4

- 5 遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

瓦質土器断面：



灰釉陶器：



実測図の中心線は実線で示している。釉薬がみられるものについては、その範囲を一点破線で示した。

- 6 遺物拓影図のうち、向かって左に外面、右に内面を示した。

- 7 遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。

法量の単位はcm、gである。() が付されるものは推定値、現存値を表す。胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で、含有量の多い順に示した。

A…白色粒子 B…黑色粒子 C…赤色粒子 D…褐色粒子 E…赤褐色粒子 F…白色針状物質
G…長石 H…石英 I…白雲母 J…黒雲母 K…角閃石 L…片岩 M…砂粒 N…礫

- 8 写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

- 9 土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局編集、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行 1994）を参考にした。

目 次

口 絵
序 文
例 言
凡 例
目 次

I 発掘調査の概要……………	1	IV 遺構と遺物……………	11
1 調査に至る経過……………	1	1 古墳……………	11
2 発掘調査・報告書作成の経過……………	1	2 竪穴住居跡……………	11
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織……………	2	3 溝跡……………	13
II 遺跡の立地と環境……………	2	4 土坑……………	16
III 遺跡の概要……………	8	5 ピット……………	18
1 調査の方法……………	8	6 遺構外出土遺物……………	18
2 検出された遺構と遺物……………	8	V 調査のまとめ……………	22

挿図目次

第1図 埼玉県の地形……………	3	第7図 第1号住居跡・土坑（1）……………	14
第2図 周辺遺跡分布図……………	4	第8図 溝跡・土坑・ピット（2）……………	15
第3図 調査地点位置図……………	9	第9図 土坑・ピット（3）……………	16
第4図 調査区全測図……………	10	第10図 土坑・ピット（4）……………	17
第5図 第11号墳（1）……………	12	第11図 出土遺物（1）……………	19
第6図 第11号墳（2）……………	13	第12図 出土遺物（2）……………	20

挿表目次

第1表 周辺遺跡一覧表……………	5	第4表 土坑一覧表……………	17
第2表 周辺古墳群一覧表……………	6	第5表 ピット計測表……………	17
第3表 第1号住居跡出土遺物観察表……………	14	第6表 出土遺物観察表……………	21

図版目次

遺構

- 図版 1 籠原裏遺跡全景（西から）
第11号墳（南から）
- 図版 2 石室検出状況
石室断面
- 図版 3 第 1 号住居跡・第17号土坑
第 2 号溝跡

- 図版 3 第18号土坑
第 1・6 号土坑
第 1 号溝跡
第15号土坑
第 9 号土坑

遺物

須恵器

- 図版 4 第11図 第11号墳周辺 9
第11図 第11号墳周辺12
第11図 第 1 号溝跡 2
第12図 遺構外出土 9
第11図 第11号墳周辺10
第11図 第 1 号溝跡 1
第 7 図 第 1 号住居跡 1
第12図 遺構外出土10
第11図 第11号墳周辺14～20
第12図 遺構外出土11～14

土師器・墨書（灰釉陶器・須恵器）・鉄製品・石器

- 図版 5 第11図 第11号墳周辺21～25
第11図 第11号墳周辺26
第11図 第11号墳周辺27
第11図 第11号墳周辺13
第12図 第12号土坑 1
第12図 遺構外出土 3・第11図 第11号墳周辺13・第12図 第12号土坑 1
第11図 第11号墳周辺28、29
第12図 第15号土坑 1、2

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

平成20年2月26日付けで森田よね氏より熊谷市教育委員会教育長あてに、熊谷市熊谷都市計画事業籠原中央第一土地区画整理事業地内の共同住宅建設予定地における埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて協議があった。これを受け、熊谷市教育委員会では2月29日から3月1日にかけて試掘調査を実施したところ、古墳の葺石、土坑等の遺構が検出された。この結果を踏まえて、平成20年4月4日付け熊教社発1015号にて熊谷市教育委員会教育長より森田よね氏あてに次のように回答した。

建設予定地は埋蔵文化財包蔵地（籠原裏遺跡・籠原裏古墳群）である。当該地は現状保存を行うか、埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい。やむを得ず現状変更する場合には、文化財保護法第93条第1項の規定により事前に埼玉県教育委員会教育長へ埋蔵文化財発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

その後、保存策について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置を講ずることとなった。

事業主と具体的な協議を重ねたところ、早急に建設を開始したい意向があったが、調査実施には9月定例議会での9月補正予算の承認が必要であり、約半年の待機期間が発生する状況であった。そこで、熊谷市教育委員会では、工事の進捗に配慮し早急に発掘調査を実施するため、平成20年5月2日付けで熊谷市籠原裏遺跡調査会を設立し、発掘調査を5月19日から実施した。

発掘調査に先立ち、文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が森田よね氏より提出され、熊谷市教育委員会は副申を添えて埼玉県教育委員会教育長へ送付した。これに対し、平成20年3月26日付け教生文第3-1114号で発掘調査実施について指示通知があった。

熊谷市籠原裏遺跡調査会会長は、文化財保護法第92条第1項の規定に基づく発掘調査の届出を平成20年5月8日付け熊籠遺発3号で提出し、熊谷市教育委員会は副申を添えて埼玉県教育委員会教育長へ送付した。これに対し、平成20年5月28日付け教生文第2-16号で発掘調査について通知があった。

2 発掘調査・報告書作成の経過

（1）発掘調査

籠原裏遺跡の発掘調査は、平成20年5月19日から平成20年6月20日にかけて行われた。調査面積は、共同住宅建設によって破壊を受ける330㎡であった。

遺構確認面まで重機による表土剥ぎを行った後、順次遺構の精査を行った。天候に恵まれず、時間的に困難であったが、6月20日には調査区全景の写真撮影を行い、器材等を撤収して現場における作業を終了した。

（2）整理・報告書作成作業

整理作業は平成20年9月1日より開始し、遺物の洗浄・注記・復元実測作業、遺構の図面整理、遺構・遺物図面のトレース作業・図版組み、遺物写真撮影、遺構・遺物写真の図版組みを行い、12月に原稿

執筆・割付を実施した。翌年1月に報告書の印刷に入り、校正を行った後、3月31日に本報告書を刊行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主 体 者	熊谷市籠原裏遺跡調査会
会 長	野原 晃（熊谷市教育委員会教育長）
理 事	菅谷浩之（熊谷市文化財保護審議会会長） 大山整治（熊谷市教育委員会教育次長）
監 事	小柴 清（熊谷市文化財保護審議会委員） 小林常男（熊谷市教育委員会教育総務課長）
事務局 長	関口和佳（熊谷市教育委員会社会教育課長）
事務局次長	吉田高一（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護担当副参事）
事務局 員	金子正之（熊谷市教育委員会社会教育課主幹兼文化財保護係長） 寺社下博（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主査） 蔵持俊輔（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主任）

II 遺跡の立地と環境

熊谷市は埼玉県北部に位置する。市の南側には荒川、北側には利根川がそれぞれ西から南東方向に向かって流れており、両河川が最も近接する地域にある。地形的には市の西側に櫛挽台地、北・東側に妻沼低地、南側は江南台地が広がる（第1図）。

櫛挽台地は洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東方向へは熊谷市北西部の西別府付近にまで延びている。標高は約36～54mで妻沼低地に向かって緩やかに下っていく。また、三ヶ尻や西別府地区では台地裾にかつて湧水地が多数あったという。

櫛挽台地の東側には沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新荒川扇状地が広がっている。新荒川扇状地は熊谷市の南西に位置する川本町の菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。また、三ヶ尻地区の荒川に面した櫛挽台地南東端には丘陵地である観音山（標高81m、第3紀層の残丘）があり、台地上からの比高差は約25m、沖積地からの比高差は約35mである。

今回報告する籠原裏遺跡は標高約37mの櫛挽台地東端縁辺部に立地している。熊谷市西部の新堀地区に所在し、すぐ西側は深谷市が隣接する。遺跡はJR高崎線籠原駅前北側、国道17号線との間約350mの間に広がっている。また、同所には古墳時代終末期の籠原裏古墳群（A）も所在し、11号墳を今回報告する。この辺り一帯は関東造盆地運動による地盤の沈降及び河川の氾濫等の影響を受け、ローム層までは厚い表土層に覆われており、現地表面から関東ローム層までは深い所で約1.8mを測る。そのため籠原裏古墳群中には墳丘までもが覆われて残存していたという珍しい状況下であり、籠原裏遺跡も含めて

残存状態が良好であった。なお、籠原裏古墳群については1～10号墳は報告済みである。

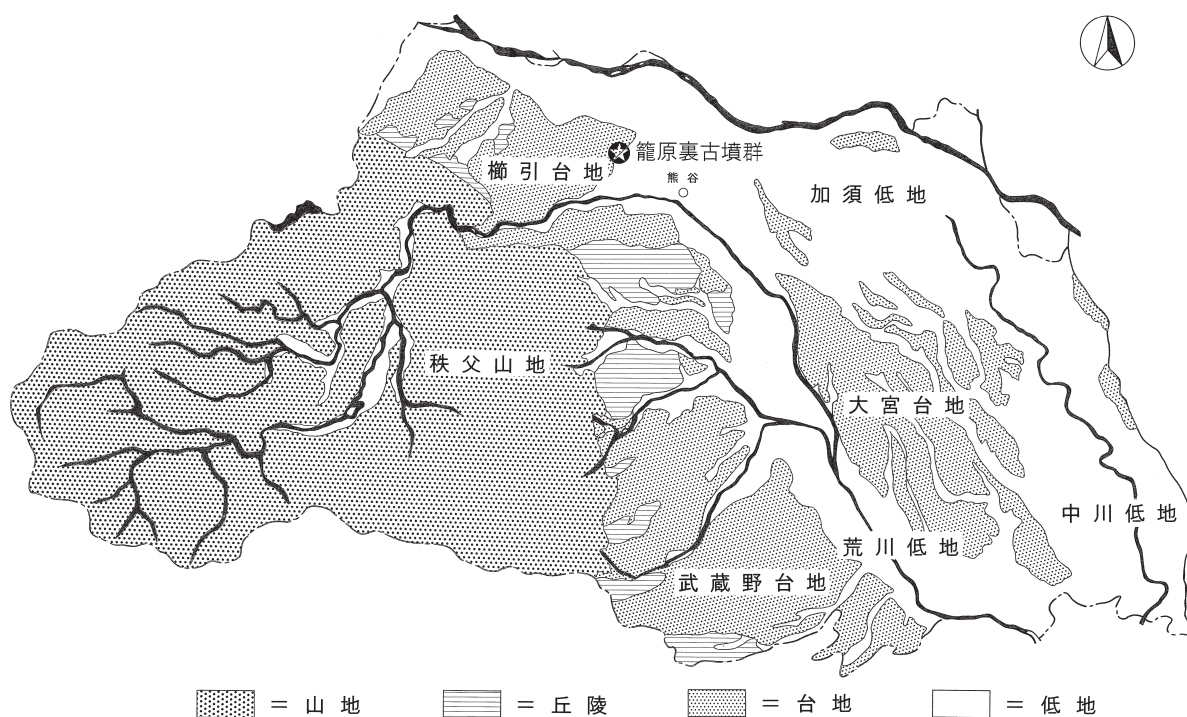
次に籠原裏遺跡周辺の歴史的環境について概観する。

旧石器時代は本遺跡から出土した黒曜石の尖頭器（既報告）が唯一の事例である。その他には荒川右岸の江南台地上に立地する西原遺跡（115）などで遺物が散見される。

縄文時代は早期段階まで溯る。荒川右岸では多数遺跡がみられるが、本遺跡周辺では櫛挽台地北端に位置する深谷市東方城跡（89）において早期の尖頭器が検出されているのみである。前期になると遺跡数も次第に増えはじめ、台地のみならず低地上からも寺東遺跡（17）などの集落跡が確認されている。中期は遺跡数が非常に多くなり、特に中期後半、加曽利E式期のものが多い。前期同様、台地及び低地上からも集落跡が確認されているが、特に櫛挽台地北東端及び台地下の妻沼低地自然堤防上に集中する。隣接する深谷市でも集落跡が多数確認されているが、自然堤防上にあるものが多い。後期になると遺跡数は減少するが、中期同様、櫛挽台地北東端、江南台地上及び台地下の自然堤防上に立地する。深谷市内においても台地縁辺部及び台地下の自然堤防上から遺跡が確認されている。晩期はさらに遺跡数が減少する。地図中には示せなかったが、市内では市東部の低地上に立地する諏訪木遺跡で集落跡が確認されたが、その他にはみられない。深谷市では低地上にいくつかの遺跡が認められる。上敷免遺跡（63）では晩期でも終末の浮線文土器片が多数検出されている。遺構からの検出ではなかったが、次代へのつながりがみてとれる資料である。

弥生時代については東日本初期弥生土器を語る上で非常に重要な資料が出土している。遺跡は縄文時代中期以降集落が営まれている櫛挽台地北東端部及び台地下の自然堤防上に集中している。

特筆すべき事項としては自然堤防上に位置する横間栗遺跡（10）から、前期末～中期前半の再埋葬が13基確認されたことが挙げられる。再埋葬一括資料は1999年3月に埼玉県指定になっている。横間栗遺跡の南東に位置する関下遺跡（11）では弥生時代中期中頃の竪穴住居跡が確認され、南側に隣接する石



第1図 埼玉県の地形



第2図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺 跡 名	時 代	No.	遺 跡 名	時 代
	熊 谷 市 (荒 川 左 岸)		63	上敷免遺跡	縄文中・弥生中・後、古墳後、奈良・平安
1	籠原裏遺跡	縄文、古墳後、平安、中・近世	64	No.142遺跡	古墳後、奈良・平安
2	在家遺跡	古墳後、奈良・平安	65	皿沼西遺跡	古墳前、平安
3	別府三丁目遺跡	奈良・平安	66	No.145遺跡	古墳後、奈良・平安
4	大竹遺跡	平安	67	皿沼城跡	中世
5	西別府館跡	平安末～中世	68	No.180遺跡	弥生中、古墳後、奈良・平安
6	西別府廃寺	古墳後、奈良・平安、中・近世	69	深谷城跡	古墳前、平安、中・近世
7	西方遺跡	奈良・平安、中・近世	70	城西遺跡	奈良・平安
8	西別府祭祀遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世	71	八日市遺跡	縄文晩、古墳後、奈良・平安、中・近世
9	根絡遺跡	縄文中・古墳前・後、奈良・平安	72	伝幡羅館跡	中世
10	横間栗遺跡	縄文後、弥生前・中、古墳前・中、奈良・平安、近世	73	No.194遺跡	古墳後
11	関下遺跡	縄文中・弥生中、古墳後	74	No.195遺跡	古墳後
12	石田遺跡	縄文中・後、弥生中、古墳前	75	No.250遺跡	奈良・平安
13	入川遺跡	縄文後、古墳前・後	76	宮ヶ谷戸遺跡	縄文中・弥生中・後、古墳後、奈良・平安、中・近世
14	深町遺跡	縄文中・後、古墳前・後、奈良・平安	77	根岸遺跡	縄文中・後、古墳後、奈良・平安、中・近世
15	埋鳥遺跡	縄文中、奈良・平安	78	常磐町東遺跡	縄文前・中、古墳後
16	別府城跡	平安、中世	79	No.199遺跡	縄文中、古墳後、奈良・平安
17	寺東遺跡	縄文前～後	80	No.198遺跡	平安
18	別府氏館跡	平安末～中世	81	疋鼻和城跡	中世
19	稲荷東遺跡	古墳後、奈良・平安	82	No.200遺跡	古墳後
20	玉井陣屋跡	平安末～中世	83	No.249遺跡	奈良・平安
21	五反畑遺跡	中世	84	No.189遺跡	奈良・平安
22	稲荷木上遺跡	古墳後	85	No.190遺跡	古墳後、奈良・平安
23	水押下遺跡	古墳後	86	城下遺跡	縄文中・後、古墳後、平安、中・近世
24	下河原中遺跡	奈良・平安	87	杉町遺跡	縄文中、古墳後、奈良・平安
25	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	88	No.202遺跡	縄文中、古墳後、奈良・平安
26	奈良氏館跡	平安末～中世	89	東方城跡	縄文早・後、中世
27	土用ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	90	No.203遺跡	奈良・平安、中世
28	天神下遺跡	古墳前・後、奈良・平安	91	幡羅遺跡	古墳後、奈良・平安
29	別府条里遺跡	奈良・平安	92	No.204遺跡	縄文中・後、古墳後、奈良・平安
30	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良・平安、中世、近世	93	No.205遺跡	古墳前
31	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安	94	No.88遺跡	古墳後、奈良・平安
32	西通遺跡	古墳後	95	No.87遺跡	縄文後
33	東通遺跡	古墳後	96	桜ヶ丘組石遺跡	縄文後
34	横塚遺跡	古墳前、平安	97	No.208遺跡	縄文中、古墳前・後、平安
35	本代遺跡	古墳後、近世	98	No.93遺跡	縄文中・後、古墳後、奈良・平安
36	下河原上遺跡	近世	99	No.94遺跡	縄文中・後
37	高根遺跡	縄文前、古墳後、平安、中・近世	100	No.207遺跡	縄文中
38	不二ノ腰遺跡	奈良・平安	101	No.206遺跡	縄文中
39	拾六間後遺跡	古墳後、奈良・平安、中世		熊 谷 市 (荒 川 右 岸)	
40	東遺跡	平安、中世	102	宮前遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
41	樋ノ上遺跡	縄文前・中、古墳後、奈良・平安、中・近世	103	宿遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
42	黒沢館跡	中世	104	上前原遺跡	縄文早～後
43	若松遺跡	中・近世	105	堀ノ内遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
44	庚申塚遺跡	近世	106	中屋敷遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
45	松原遺跡	中・近世	107	宮下遺跡	縄文早、古墳後、奈良・平安、中・近世
46	社裏遺跡	中世	108	東原遺跡	縄文早～中、中世
47	社裏北遺跡	中世	109	新屋敷遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
48	社裏南遺跡	中世	110	大林遺跡	古墳後、奈良・平安
49	三ヶ尻遺跡	縄文前～後、弥生中、古墳後、奈良・平安、中世	111	権現坂埴輪窯跡	古墳後
50	森遺跡	古墳後	112	権現坂遺跡	縄文前・中、古墳中・後
51	弥藤吾新田遺跡	古墳前・中	113	北方遺跡	縄文早
52	飯塚北遺跡	弥生中、古墳後、奈良・平安	114	富士山遺跡	縄文早～後、弥生後、古墳前、奈良
53	飯塚遺跡	弥生中、古墳後、奈良・平安	115	西原遺跡	旧石器、縄文前～後、奈良・平安
	深 谷 市 (荒 川 左 岸)		116	新田裏遺跡	古墳後、奈良・平安
54	大門遺跡	奈良・平安	117	姥ヶ沢遺跡	縄文早～後、弥生後、古墳前・後
55	前遺跡	古墳前、奈良・平安、中世	118	姥ヶ沢埴輪窯跡	古墳後
56	清水上遺跡	縄文晩、弥生中、古墳前・後、奈良・平安	119	万吉西浦遺跡	縄文中、古墳、平安、近世
57	原遺跡	縄文後・晩、古墳後		深 谷 市 (荒 川 右 岸)	
58	東川端遺跡	古墳前・後、奈良・平安	120	鹿島平方裏遺跡	古墳後、奈良・平安
59	明戸東遺跡	縄文中・後、弥生後、古墳後、奈良・平安	121	山之越遺跡	縄文後
60	新田裏遺跡	古墳中、弥生後、奈良・平安、中世	122	舟山遺跡	縄文早～後、中世
61	新屋敷東遺跡	縄文中、古墳後、奈良・平安	123	竹ノ花遺跡	縄文早・前、奈良・平安
62	本郷前東遺跡	縄文後、古墳後、奈良・平安	124	荷鞍ヶ谷戸遺跡	縄文後
			125	諦光寺廃寺	奈良・平安

第2表 周辺古墳群一覧表

No.	遺 跡 名	時 代	No.	遺 跡 名	時 代
熊 谷 市			I	村岡古墳群	古墳末
A	籠原裏古墳群	古墳末	J	三ヶ尻古墳群	古墳後
B	在家古墳群	古墳末	K	上江袋古墳群	古墳後
C	別府古墳群	古墳後	深 谷 市		
D	奈良古墳群	古墳中期後～末	L	木の本古墳群	古墳後
E	玉井古墳群	古墳後	M	長在家古墳群	古墳末
F	原島古墳群	古墳後	N	鹿島古墳群	古墳後～末
G	石原古墳群	古墳後	O	清水山古墳群	古墳後
H	広瀬古墳群	古墳末	P	上大塚古墳群	古墳後

田遺跡（12）からも同時期の遺構と遺物が検出されており、集落跡が広がる可能性がある。また地図中には示せなかったが、市東部には東日本でも最古段階の環壕集落である池上遺跡やその墓域とされる行田市小敷田遺跡などがみられる。深谷市では自然堤防上にいくつか遺跡がみられ、上敷免遺跡では横間栗遺跡と同時期の再埋葬が確認されている。また包含層からではあるが、県内では初の遠賀川式土器の壺の胴部片も出土している。

中期後半以降は市東部では北島遺跡、前中西遺跡などがあるが、西部では遺跡数が少なく、深谷市で明戸東遺跡（59）など後期の遺跡が自然堤防上においていくつか確認されているだけである。

古墳時代になると自然堤防上への進出がより活発化する。前期は本遺跡周辺では確認例がやや少ないが、一本木前遺跡（30）では90数軒もの膨大な住居跡の他に4基の方形周溝墓等も確認されている。特筆すべき事項としては2号方形周溝墓の主体部からヒスイ製の勾玉や緑色凝灰岩製の管玉、人歯等が検出されたことが挙げられる。なお、住居跡群と周溝墓群には若干の時期差が存在し、集落跡が古く、周溝墓群が新しいことが判明している。深谷市では東川端遺跡（58）をはじめとして自然堤防上の集落跡、方形周溝墓等が確認されている。中期は本遺跡周辺では5世紀末の古墳として市の指定史跡になっている横塚山古墳（D）があるのみである。B種横刷毛の埴輪を持つ帆立貝式前方後円墳であるが、後円部は一部欠損している。市北東部では北島遺跡、常光院東遺跡、中条古墳群周辺などで確認例がみられる。後期になると遺跡数が爆発的に増加する。集落跡は大規模になり、古墳も群として多数みられるようになる。集落跡は自然堤防上にも多数営まれるようになり、奈良・平安時代へ継続して営まれる遺跡が多い。

古墳群は今回報告する籠原裏古墳群（A）の他にも多数の古墳群が台地及び自然堤防上にみられる。荒川右岸の台地上にも埼玉県指定史跡である深谷市鹿島古墳群（N）をはじめとして多数の古墳群がみられるようになる。また、本市には権現坂埴輪窯跡（113）、姥ヶ沢埴輪窯跡（120）など埴輪の窯跡もみられる。

市内の古墳群で特筆すべきことは、籠原裏古墳群からは墳形が八角形を呈する古墳時代終末期の八角墳が検出されたこと、市中央部にある肥塚古墳群では埋葬施設に荒川水系の石材である川原石を使用した古墳と利根川水系の角閃石安山岩を使用した古墳が混在すること、広瀬古墳群（H）中の宮塚古墳は上円下方墳という特異な形態をしていること（昭和38年に国指定史跡）などが挙げられる。

律令体制の始まる奈良・平安時代の本遺跡周辺一帯は武蔵国幡羅郡に属する。幡羅郡は上秦、下秦、広沢、荏原、幡羅、那珂、霜見、余部の八郷からなる中郡であり、熊谷市北・西部、深谷市東部等を含む一帯が該当すると考えられている。平成13年には熊谷市との境に位置する深谷市幡羅遺跡（91）から

郡衙の正倉と推定される大型建物群が確認され、幡羅郡衙推定地として確認調査が継続して行われている。その結果、これまでに20数棟の大型正倉建物群や道路跡などが確認されている。確認調査は本市も含めて継続的に行われており、後述する熊谷市西別府廃寺（6）、西別府祭祀遺跡（8）も含めてこの地域一帯は、当時の中心地だったことが徐々に明らかになってきている。

集落跡は前述のとおり、古墳時代後期以降引き続き営まれる遺跡が多く、かつ規模の大きいものが多い。また本遺跡周辺の集落跡から出土する須恵器は、武蔵国四大窯跡の1つである寄居町末野窯跡産のものを多く含む傾向にあり、鳩山町南比企窯跡産を主体とする市東部の遺跡とは様相が異なっている。

集落跡以外で注目すべき遺跡としては、前述の西別府廃寺と西別府祭祀遺跡がある。両遺跡は櫛挽台地北東端の市西部西別府地区に所在する。西別府廃寺は8世紀初頭に創建された県内でも古い寺院跡であり、平成2・4年に行われた発掘調査では、瓦溜り状遺構、基壇跡、溝跡等が検出されている。出土した瓦には9世紀後半まで下るものもみられ、寺院は平安時代まで存続していたと考えられている。

西別府祭祀遺跡は西別府廃寺の西部の台地縁辺部に位置し、湯殿神社裏の湧水堀にある。神社裏の湧水部分からは土師器、須恵器の他に馬形、櫛形、勾玉形、剣形、有線円板等の滑石製模造品が多数検出され、これらの遺物は水辺での祭祀に用られたものと考えられている。平成4年度におこなわれた発掘調査では、古墳時代末から平安時代でも末期に位置づけられる土器群が多数検出されており、平安時代の終わり頃まで祭祀遺跡として存続していたものと思われる。両遺跡と深谷市幡羅遺跡は時間的・空間的に密接な関係にあったことは明白であり、今後実施される確認調査によって詳細がさらに判明してくるものと思われる。

平安時代末から中世にかけては武蔵七党やその他在地武士団の館跡がみられるようになるが、その実態は不明なものが多い。本遺跡の北東にある別府城跡（16）は、別府氏の居館で現在も土塁と空堀が一部残っている。また市内では南西部の三ヶ尻地区で中世の遺跡や遺構が比較的多く確認されている。中でも黒沢館跡（42）は、発掘調査の結果、出隅を持ち全周する堀と土塁、虎口跡等が検出され、渡辺崋山が記した文献『訪貳録（ほうへいろく）』所収の「黒沢屋敷」と発掘調査成果が一致するという大変貴重な例である。また周辺に所在する樋ノ上遺跡（41）、若松遺跡（43）、社裏遺跡（46）、社裏北遺跡（47）、社裏南遺跡（48）からは埋葬跡が多数検出されている。深谷市では皿沼城跡（67）、深谷城跡（69）、庁鼻和城跡（81）、東方城跡（89）など城跡が多数確認されている。

近世については櫛挽台地北東縁辺部に立地する西方遺跡（7）から墓地群が確認されている。西方遺跡をはじめとしていくつか例がみられるが、不明な点が多いのが実状である。

Ⅲ 遺跡の概要

1 調査の方法

発掘調査の方法は、1辺5mのグリッド方式を用いて行い、調査区全体を網羅できる様に、北西隅をA-1として南へA・B・C・・・、東へ1・2・3・・・とし、Aラインは東から西へA-1・A-2・A-3・・・と呼称した。Bライン以南もAラインと同様に呼称し、グリッド設定を行った。

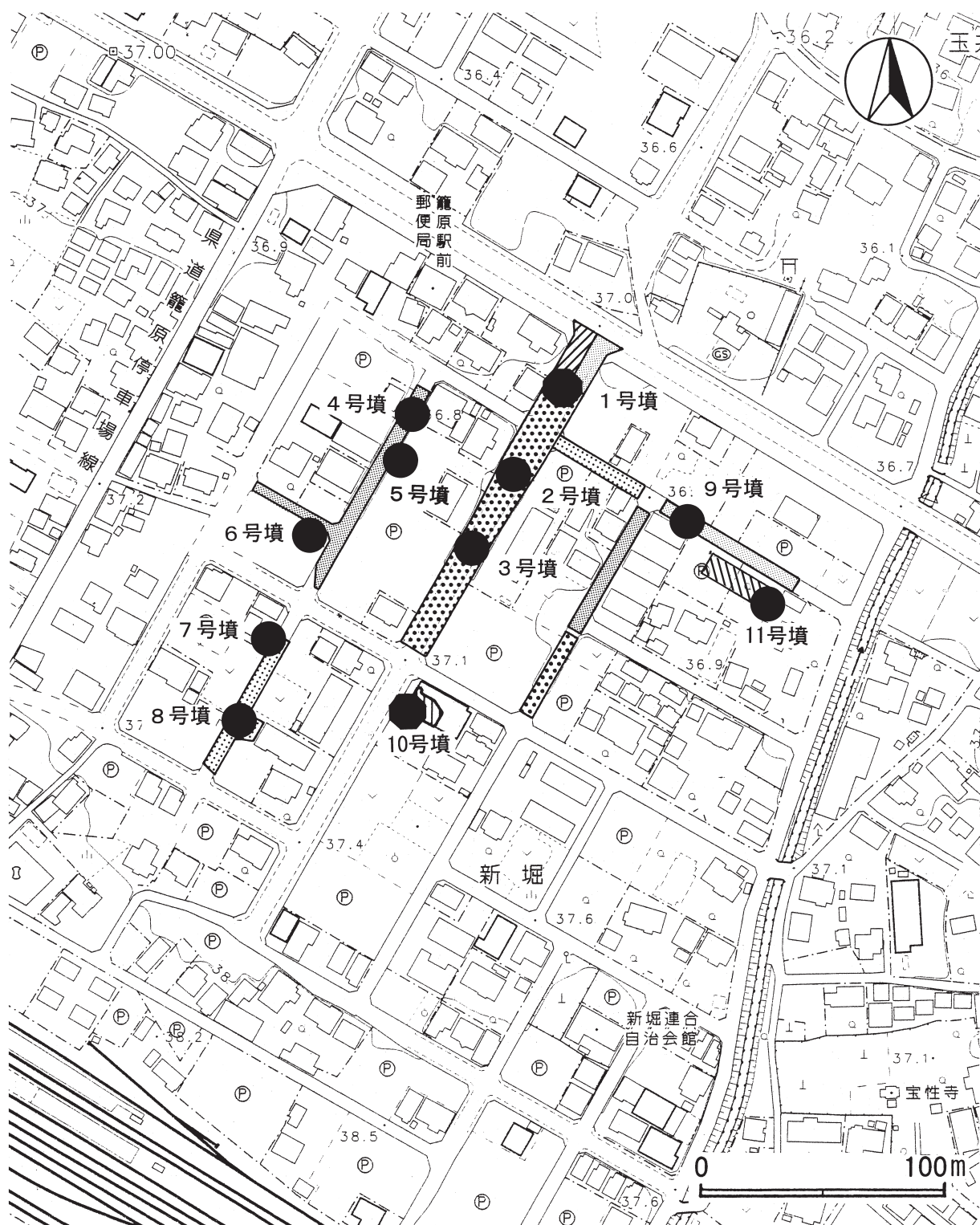
発掘調査は、重機による遺構確認面までの表土剥ぎを行った後、上記グリッドの設定を行った。なお座標は、現地においては世界測地系に基づく基準点測量によったが、既報告との整合をとるため、報告書においては日本測地系に基づく基準点に変換した。グリッド設定後は、人力による遺構確認のための精査を実施し、確認された各遺構は各々手掘りを行った。遺物は必要に応じて写真撮影・実測後、慎重に取り上げを行った。遺構も遺物同様必要に応じて写真撮影した後、実測を行った。そして最後に遺構全体の写真撮影を行い、全測図の実測を行った。

2 検出された遺構と遺物

本調査によって検出された遺構は、古墳1基、竪穴住居1軒、溝2条、土坑18基、ピット12基であった。籠原裏遺跡に係る遺構がほとんどであり、古墳時代の遺構は11号墳及びその周溝を除き、明確なものはない。遺物は、須恵器・土師器・灰釉陶器・鉄製紡錘車等が出土し、コンテナ2箱分の出土量であった。これらの遺物も籠原裏遺跡に係るものであり、平安時代を中心としている。

本墳については洪水による堆積土により良好な状態で保たれ、葺石が多数遺存していた。残念ながら、半ばから墳頂にかけて削平されており、所々に攪乱を受けている箇所も見受けられたが、墳丘全体の約1/4を検出した。石室を検出することもできたが、配水管等により一部破壊を受けている。平石積みで構築されているが、僅かに三段程度が遺存しているに留まる。形態は胴張型の横穴式石室と推定される。周溝については、立ち上がりが不明瞭であり、深くは掘り込まれていない。遺物について古墳に係るものがなく、帰属する時期を明確にし得なかったが、形態的な特徴は本古墳群から逸脱しないことを踏まえると、古墳時代末期の群集墳として捉えて差し支えないと考えられる。

籠原裏遺跡に係る遺構は、遺物の検出が少ないため不明確な部分があるが、平安時代に帰属するものと考えられ、出土遺物の時期的な偏りがそれを裏付ける。住居跡は1軒のみの検出だが、やはり該期に帰属する。土坑やピットは際立った特徴は見られない。ただし第2号溝跡は、その軌道と深さ、規模などから古墳の周溝である可能性が示唆される。遺物は須恵器が全て末野産であり、南比企産は見られず、その時期は9世紀後半から10世紀初頭に該当するものが多い。



- | | | | |
|---|-------------|---|-------------|
|  | = 昭和61年度調査区 |  | = 平成4年度調査区 |
|  | = 昭和62年度調査区 |  | = 平成11年度調査区 |
|  | = 昭和63年度調査区 |  | = 平成20年度調査区 |
|  | = 平成元年度調査区 | (平成11・20年度籠原裏遺跡調査会) | |

第3図 調査地点位置図

IV 遺構と遺物

1 古墳

第11号墳（第5・6図）

位置・状態

C-5グリッドからE-7グリッドに位置する。現在、確認されている11基の古墳のうち最東端にあたり、北西約50mに9号墳がある。

検出されたのは、全体の約1/4にあたる墳丘北東側と、周掘北東部、及び主体部の玄室奥壁東側から側壁東側の一部を検出した。残りの部分は調査区外である。墳丘・主体部ともに削平を受けており、攪乱も一部見受けられた。

墳丘・外部施設

墳丘は現地表下0.6mで確認された。主軸はN-14°-Eを指す。墳頂部は既に削平されていたが、墳丘は1m前後の高さで下段のみ検出された。葺石は墳丘の周りより検出されたが、そのほとんどが原位置を留めており、遺存状態は良好であると言える。その配列は、礫の長軸を辺に交差させる形で、規則性がみられ、直線的に配置されていた。残存する葺石から墳丘の形状を想定すると、多角形を呈するようにも見ることができるが、確証を得るための材料に乏しいこともあり、ここでは円墳の範疇で捉えておく。

墳丘の規模は径12m前後と推定される。周掘は現地表下1.3m程で検出され、北部から北東部で立ちあがるが、外側の立ち上がりが不明瞭な部分もみられた。北東部から東部にかけては確認されなかった。

主体部

主体部は上部が削平されており、玄室奥壁と側壁は三段程度の積石を残すのみである。礫床は検出されなかった。形状は、本古墳群中の古墳と同様に、河原石を使用した胴張り型の横穴式石室であると推察される。なお、石室に掘り方はみられなかった。被葬者・副葬品等は検出されていない。

出土遺物

出土遺物は籠原裏遺跡から流れ込んだ他の時代のものであり、本墳に伴う遺物は検出されなかった。

小結

本墳は墳丘直径12m程の円墳と推定される。主体部は河原石による胴張り型の横穴式石室であると考えられ、掘り方はみられない。周掘は全周せず、北東部で立ち上がることが確認された。墳丘の規模から考察すると、本古墳群中最大のもは8号墳の約13mであるが、本墳は引けをとらない規模であり、本古墳群中の主要な墳であるとも考えられる。埴輪をもたないことから、7世紀以降の築造と思われる。

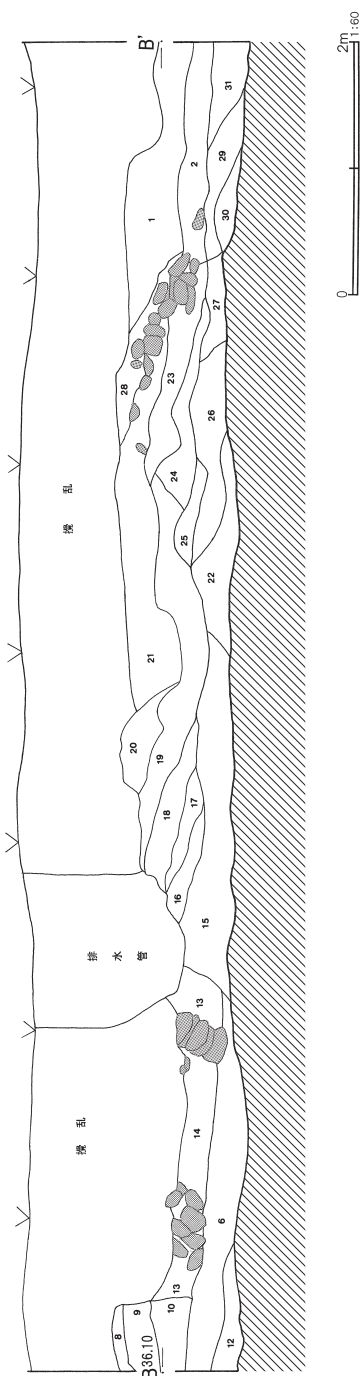
2 竪穴住居跡

第1号住居跡（第7図）

C-4・5グリッドに位置する。半分は調査区外のため全体像は不明であるが、東西壁面の様相からカマドは北側にあると考えられる。軸の長短は不明であるが、東西軸は2.8mを測る。主軸はN-22°-W方向と思われる。南壁東部を17号土坑に切られている。

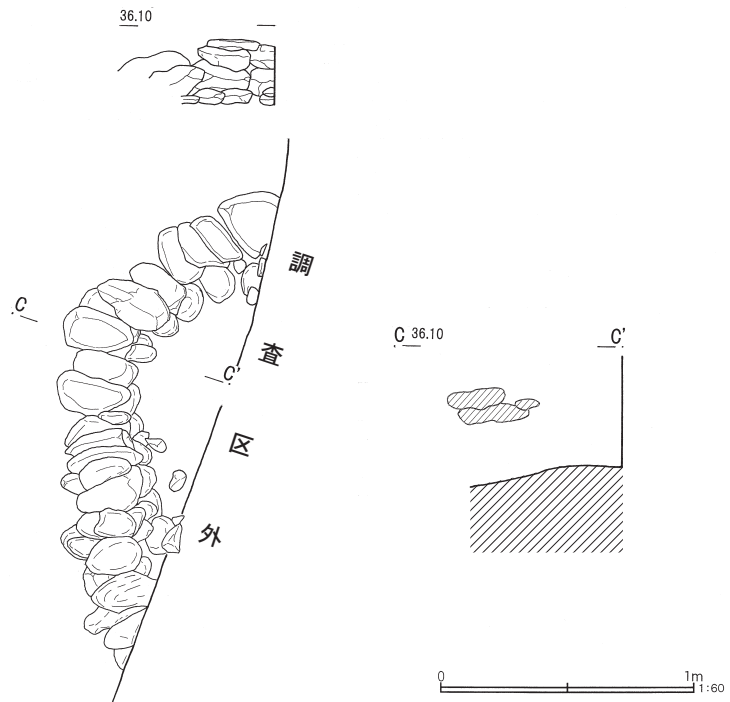


第5図 第11号墳(1)



調査区南壁・東壁
土層説明 (AA'・BB')

- 1 淡黄色土:しり強、粘性有。
- 2 黄褐色土:粘性弱。淡黄色土多量含む。
- 3 黄褐色土:粘性有。淡黄色土粒子多量含む。
- 4 黒褐色土:粘性無。ローム粒子、淡黄色粒子微量含む。
- 5 暗褐色土:粘性無。ローム粒子含む、黒褐色土小ブロック微量含む。
- 6 黒褐色土:粘性無。
- 7 極暗褐色土:粘性無。ローム粒子を微量含む。
- 8 極暗褐色土:粘性無。ローム小ブロック少量含む。ローム粒子含む。
- 9 極暗褐色土:粘性無。ローム粒子含む。
- 10 黒褐色土:粘性無。ローム粒子微量含む。ロームブロック含む。
- 11 褐色土:しり弱い。粘性無。ローム大ブロック多量含む。黒褐色ブロック含む。
- 12 暗褐色土:粘性無。ロームブロック含む。
- 13 黒褐色土:粘性無。ローム粒子を均一に含む。
- 14 黒褐色土:しり弱い。粘性無。ローム粒子を均一に含む。
- 15 黒褐色土:粘性無。
- 16 黒褐色土:粘性無。ローム中ブロック多く含む。ローム粒子含む。
- 17 黒褐色土:粘性無。ローム小ブロックを少量含む。ローム粒子少量含む。
- 18 黒褐色土:粘性無。ローム中ブロック含む。ローム粒子含む。
- 19 黒褐色土:粘性無。ローム粒子を微量含む。淡黄色粒子・小ブロック少量含む。
- 20 暗褐色土:しり弱い。粘性無。淡黄色粒子を含む。
- 21 にぶい黄褐色土:粘性無。淡黄色の粒子、ブロック微量含む。
- 22 暗褐色土:しり弱い。粘性無。淡黄色粒子、ローム粒子含む。
- 23 にぶい黄褐色土:粘性弱。ローム粒子含む、淡黄色のブロック粒子、少量含む。
- 24 暗褐色土:粘性無。ロームブロック粒子含む、淡褐色粒子少量含む。
- 25 褐色土:粘性弱。ロームブロック、粒子含む、淡黄色粒子極微量含む。
- 26 黒褐色土:粘性弱。ロームブロック、粒子含む、淡黄色粒子極微量含む、黒褐色土ブロック含む。
- 27 黒褐色土:粘性弱。淡黄色小ブロック・粒子少量含む。
- 28 褐色土:粘性弱。淡黄色粒子を含む。
- 29 黒褐色土:粘性弱。ローム粒子微量含む、淡黄色小ブロック粒子少量含む。
- 30 黒褐色土:粘性弱。淡黄色ブロック・粒子少量含む。
- 31 にぶい黄褐色土:しり強い。粘性有。淡黄色ブロック・粒子を含む。焼土・炭化物含む。



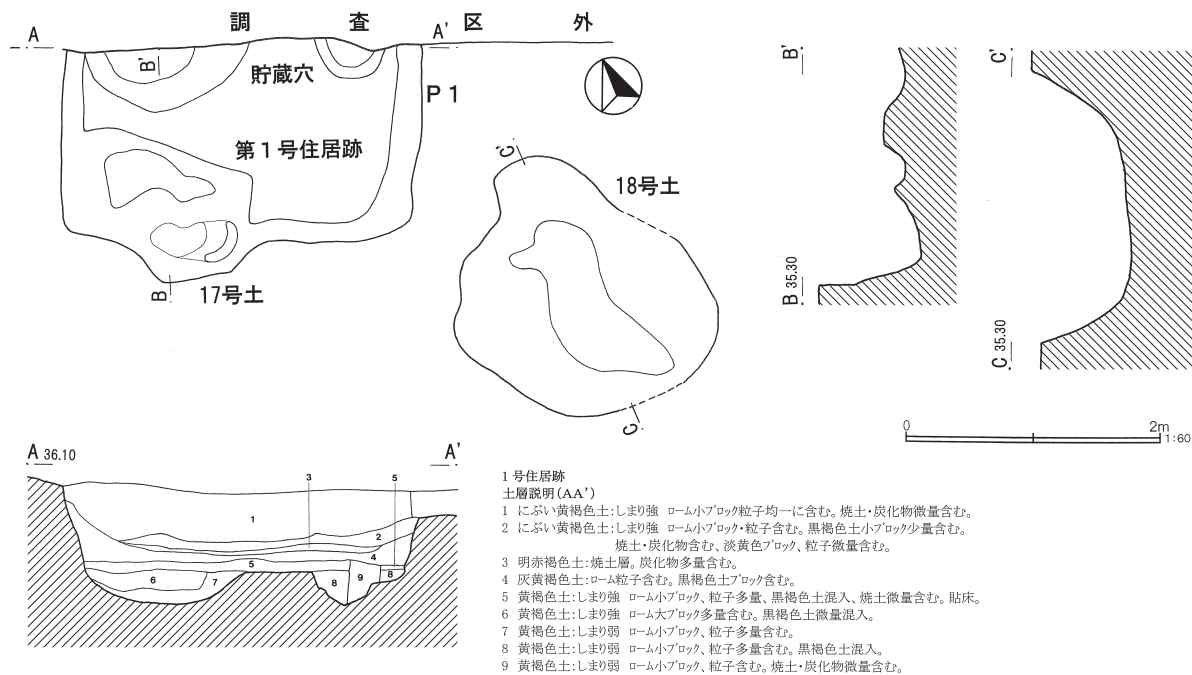
第6図 第11号墳 (2)

出土遺物は、須恵器坏、鉢、土師器甕である。1は須恵器坏である。体部から口縁部まで直線的に立ち上がる。回転糸切り痕を残す。2は土師器甕の底部である。上→下方向へナデが施されている。3は須恵器鉢の口縁部片である。本住居跡は9世紀後半に帰属するものと考えられる。

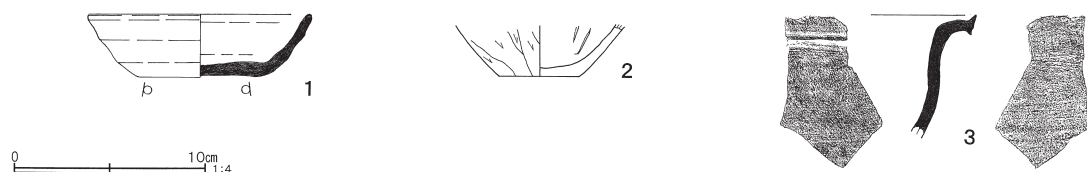
3 溝跡

第1号溝跡 (第8図)

A-2グリッド～C-1グリッドに位置する。やや東西方向へ傾くが、南北方向へ調査区を縦断し、



第1号住居跡出土遺物



第7図 第1号住居跡・土坑(1)

第3表 第1号住居跡出土遺物観察表

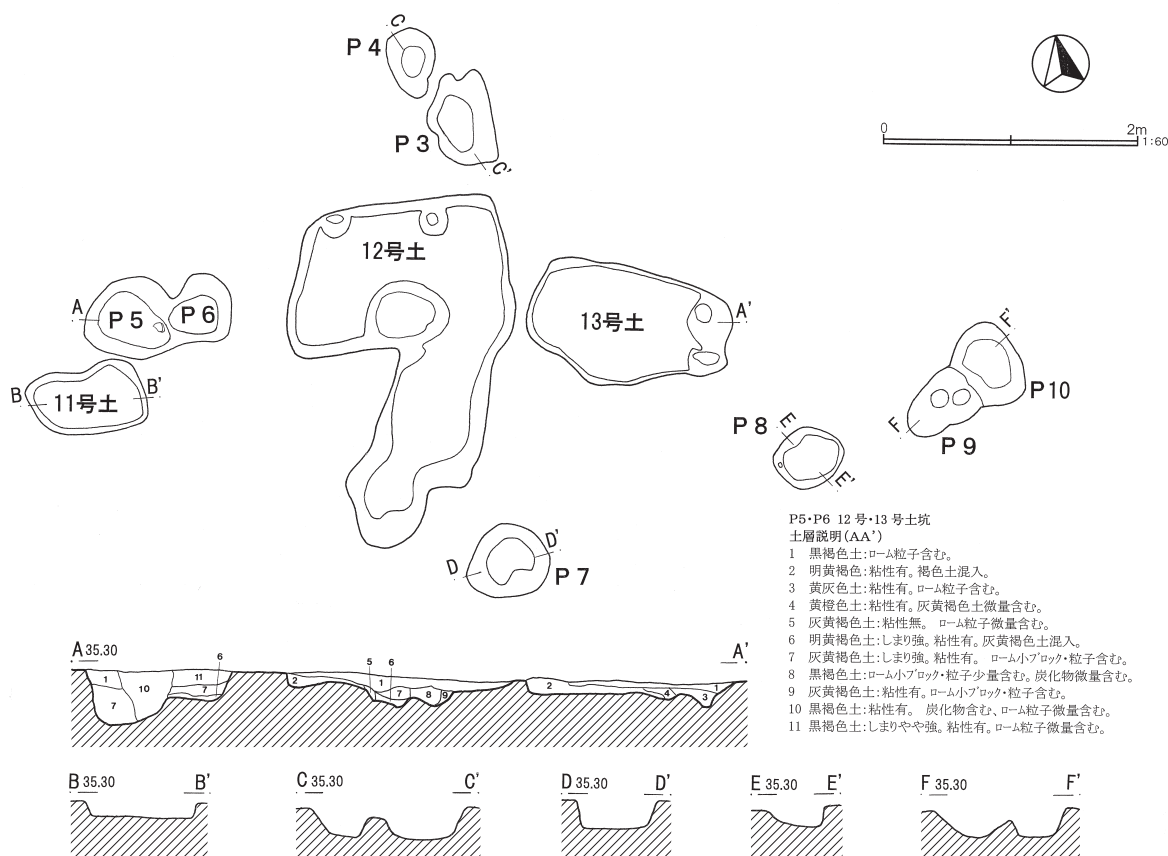
出土位置	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備	考
1号住居跡	1	須恵器 坏	11.7	3.4	6.2	ABGHKMN	灰黄色	A	70%	末野産	
1号住居跡	3	須恵器 鉢	-	-	-	ABGHJN	暗青灰色	A	口縁部片	末野産	
1号住居跡	2	土師器 甕	4.2	-	-	ABDEGHK	明赤褐色	A	底部90%	底部ヘラケズリ 底部~胴部片	

両端とも調査区外へ延びている。最大幅1m、深さ0.3mを測る。底面は平坦であり断面は逆台形状を呈し、南半分からやや落ち込む。複数の遺構と切り合い関係にあり、7号土坑、8号土坑に切られているが、2号溝よりは新しい。

出土遺物(第11図)は、須恵器坏、皿、甕である。1は須恵器坏である。回転糸切り痕を残す。2・3は皿であり、2は高台貼り付けである。4は甕の口縁部片である。本溝跡は9世紀後半に帰属するものと考えられる。

第2号溝跡 (第8図)

B-1グリッド~C-1グリッドに位置する。現地表面下約1.3mで検出された。最大幅2m、深さ0.5mを測る。調査区東壁から南壁へ、緩やかにカーブするように廻る。1号溝跡と切り合い関係にあり、1号溝跡に切られる。出土遺物は 須恵器坏、皿を出土した(第11図)。全て末野産である。1~4は坏であり、いずれも回転糸切り痕を残す。3のみ体部下端にヘラ削りによる整形が加えられている。5は皿である。これらの出土遺物は流れ込みであり、確証はないが、規模や形状が本古墳群の周溝と類似することから推定し、古墳の周溝である可能性を示唆しておく。



4 土坑

土坑は18基検出されている。以下、事実記載が必要なもののみ記載し、その他は一覧表を参照されたい。

第1号土坑 (第8図)

A-1グリッドからB-2グリッドに位置する。長軸1.03m、短軸0.72m、確認面からの深さ0.15mを測る。遺物等の検出はなかったが、第1号溝と同様の自然堆積が確認できたため同時期の9世紀後半の遺構と考えられる。

第2号土坑 (第8図)

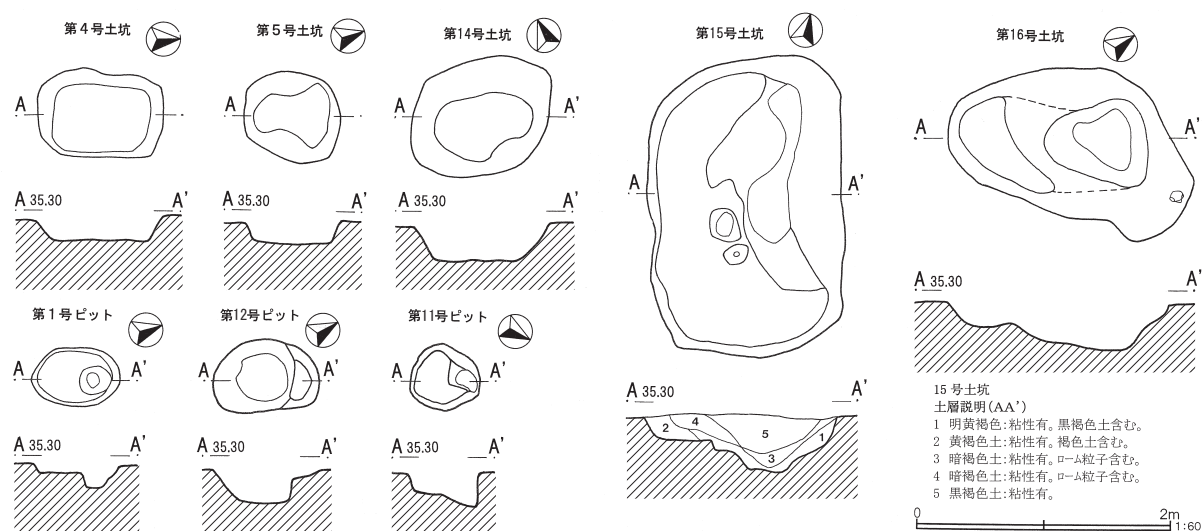
A・B-2グリッドに位置する。長軸1.15m、短軸0.68m、確認面からの深さ0.5mを測り、形状は方形を呈する。軸中心よりやや東よりに柱根の痕跡が残る。第1号土坑と同様に、遺物等の検出はなかったが、覆土より第1号溝と同時期の遺構と考えられる。

第3号土坑 (第8図)

B-2グリッドに位置する。長軸1.74m、短軸1.09m、確認面からの深さ0.45mを測る。軸中心よりやや北西よりに柱根の痕跡が残る。第2号土坑にも柱根があるため、延長線上を精査したが確認できなかったため、ここでは土坑としておく。遺物等の検出はなかったが、覆土より第1号溝と同時期の遺構と考えられる。

第4号土坑 (第10図)

B-2グリッドに位置する。長軸1.00m、短軸0.63m、確認面からの深さ0.20mを測る。形状は方形である。須恵器坏の口縁部片 (第11図) を検出しており、形状より9世紀前半のものである。



第10図 土坑・ピット (4)

第4表 土坑一覧表

土坑No.	挿図No.	位置	平面形	長(m)	短(m)	深(m)	時期	覆土	出土遺物	備 考
1号土	第8図	A・B-1・2	方形	1.03	0.72	0.15	9c後	自然	—	
2号土	第8図	A・B-2	方形	1.15	0.68	0.50	9c後	自然	—	
3号土	第8図	B-2	不整形円形	1.74	1.09	0.45	9c後	自然	—	
4号土	第10図	B-2	方形	1.00	0.63	0.20	9c代	自然	須恵器	
5号土	第10図	B-2	円形	0.82	0.68	0.19	9c代	自然	須恵器	
6号土	第8図	B-1	方形?	1.20	0.61	0.22	不明	埋戻	—	
7号土	第8図	B-1・2	方形	1.17	0.68	0.08	不明	埋戻	—	8号土より古。1号溝より新。
8号土	第8図	B-1	方形	1.00	0.61	0.10	不明	埋戻	—	7号土・1号溝より新。
9号土	第8図	B-1	円形	0.86	0.83	0.30	不明	自然	—	
10号土	第8図	B-2	方形?	1.43	0.46	0.26	不明	自然	—	
11号土	第9図	C-2	方形	0.99	0.51	0.13	不明	自然	—	
12号土	第9図	C-2	不整形	2.91	0.75	0.36	9c後	自然	須恵器	墨書「西」
13号土	第9図	C-2・3	方形	1.63	0.83	0.28	不明	自然	—	
14号土	第10図	C-3	円形	1.26	0.94	0.34	不明	自然	—	
15号土	第10図	C-3・4	方形	2.37	1.49	0.48	不明	自然	石器	
16号土	第10図	D-4	不整形円形	1.99	1.11	0.44	9c代	自然	須恵器	
17号土	第7図	C-4・5	不整形円形	1.28	0.46	0.68	不明	自然	—	1号住より新。
18号土	第7図	C-5	不整形円形	2.21	1.70	0.79	不明	自然	—	

第5表 ピット計測表

No.	位置	長径	短径	深さ	備 考	No.	位置	長径	短径	深さ	備 考
P 1	B-2・3	70	46	19		P 7	C-2G	68	59	23	
P 2	B-2	57	54	23		P 8	C-3G	56	49	16	
P 3	C-2	58	35	24		P 9	C-3G	60	35	18	
P 4	B・C-2	78	48	22		P 10	C-3G	68	46	24	
P 5	C-2	76	67	42	P 6より新。	P 11	D-3G	55	49	33	周辺遺構との新旧不明
P 6	C-2	53	52	30	P 5より古。	P 12	B-4G	85	55	26	周辺遺構との新旧不明

第10号土坑 (第8図)

B-2グリッドに位置する、不整形な土坑である。須恵器甕の胴部片(第12図)を検出している。焼成が良好であり、内部は無文である。9世紀代の遺物と思われる。

第12号土坑（第9図）

C-2グリッドに位置する。形状が不整形であり、不明確な部分が多いが、ここでは土坑として取り扱うこととした。長軸2.91m、短軸0.75m、確認面からの深さ0.36mを測る。遺物は酸化焰焼成の須恵器高台付皿（第12図）である。底部に「西」の墨書が記されている。高台はハの字に開く。9世紀後半の所産。

第15号土坑（第10図）

C-3・4グリッドに位置する。長軸2.37m、短軸1.49m、確認面からの深さ0.48mを測り、形状は隅丸方形を呈する。本遺構から黒曜石製の石器2点（第12図）が検出されている。1は尖頭器。2はスクレイパー。縄文時代の石器と思われる。流れ込みの遺物と判断されるため、遺構の時期は不明である。

第16号土坑（第10図）

D-4グリッドに位置する。長軸1.99m、短軸1.11m、確認面からの深さ0.44mを測り、形状は不整形円形である。遺物は須恵器坏（第12図）である。底部は8.6cmを測り、回転糸切り無調整。9世紀前半の遺物と考えられる。

5 ピット

ピットは12基を確認している。残念ながら、規格に沿う配置での検出はされなかった。

6 遺構外出土遺物

出土遺物は、平安時代のものが主体を占め、わずかに縄文時代、中世のものが確認された。種別みると、須恵器・土師器が大半を占めるが、灰釉陶器、瓦質土器、土製品、鉄製品、石器等も出土している。残念ながら、古墳に伴う遺物は確認されていない。出土遺物については、概略を記載するに留め、詳細なデータは一覧表を確認いただきたい。

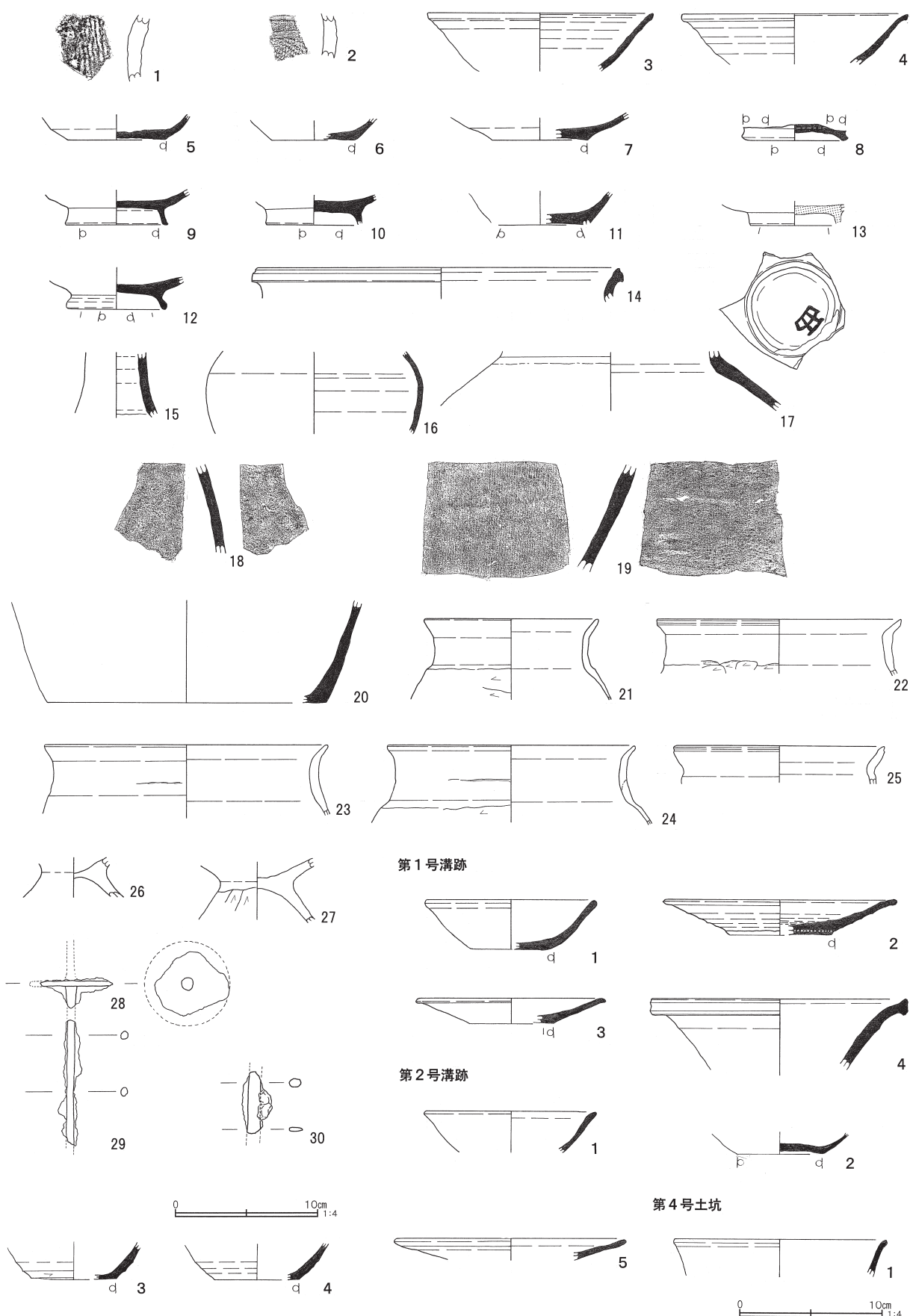
第11号墳周辺（第11図）

遺物は墳丘、墳頂、周溝周辺等から出土しているが、全て古墳に伴う時期のものではないため、第11号墳出土として一括でまとめた。縄文土器深鉢片、須恵器坏、高台碗、高台皿、長頸瓶、短頸壺、甕、灰釉陶器高台皿、土師器甕、台付甕、紡錘車、刀子が出土している。ほとんどが平安時代の遺物であり、9世紀後半から10世紀初頭に帰属する。須恵器については末野産が大半を占める。2は磨消縄文が施されている。縄文時代中期のものか。3・4は須恵器坏。底部が欠損しているが、推察するに口径：底径の比率が高くなり、9世紀後半以降の特徴を示している。13は灰釉陶器皿。内面に極僅かに施釉がみられた。底部に「西」と墨書されている。21から25は土師器甕だが、25を除きコの字口縁である。25は口縁～頸部がくの字に近い形状である。28から30は鉄製紡錘車。28と29は同一個体の可能性がある。

遺構外出土

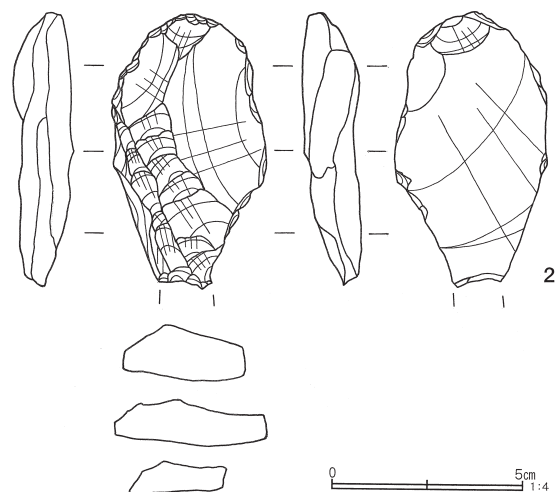
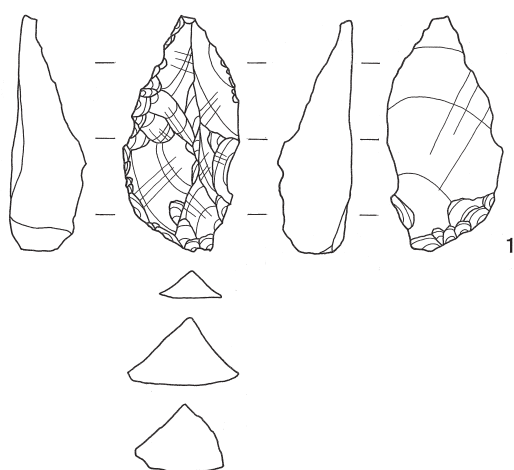
遺構外出土の遺物として図示できたのは、わずかに16点であった。1～7は須恵器坏、8は碗、9は高台付皿、10は蓋、11～14は甕、15は土錘、16は瓦質土器甕である。概観すると、主に9世紀後半から10世紀初頭にかかる遺物が多く、時期区分が不明確なものも同時期に帰属すると思われる。1は口径が大きく、8世紀末から9世紀前半のもの。3は体部外面に墨書されている。部分的なため、文字は不明。10の蓋はつまみが偏平であり、口唇部を欠く。11・12は甕の口縁部片であるが、口縁部が引き出されている。

第11号墳周辺



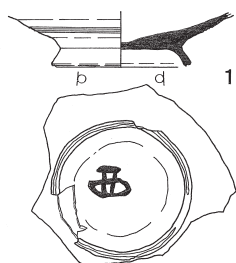
第11図 出土遺物 (1)

第15号土坑

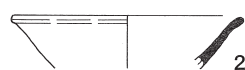


第10号土坑

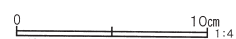
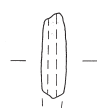
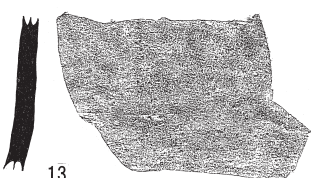
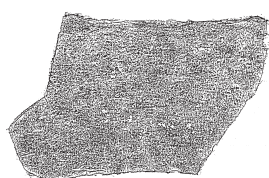
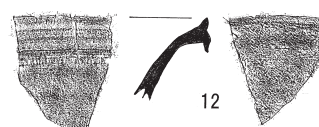
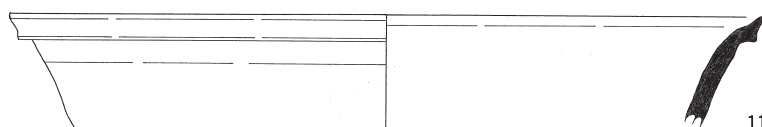
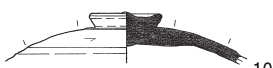
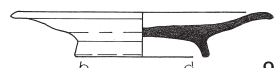
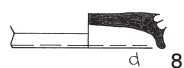
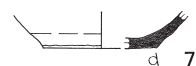
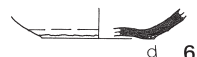
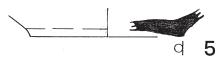
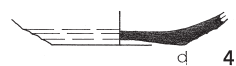
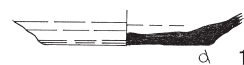
第12号土坑



遺構外出土



第16号土坑



第12図 出土遺物(2)

第6表 出土遺物観察表

出土	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備 考
11号墳	1	縄文土器深鉢	-	-	-	BHIJN	明赤褐色	B	胴部片	R L 単節縄文
11号墳	2	縄文土器深鉢	-	-	-	AGHIJMN	暗褐色	B	胴部片	R L 単節縄文 磨消縄文
11号墳	3	須恵器 坏	(16.0)	(4.1)	-	AEGHJ		B	口縁部15%	未野産
11号墳	4	須恵器 坏	(16.0)	(3.6)	-	ABEGHIMN	灰色	A	口縁部20%	未野産
11号墳	5	須恵器 坏	-	(1.8)	(7.0)	ABGHJM	灰黄色	B	体～底部片	未野産
11号墳	6	須恵器 坏	-	(1.4)	(6.0)	AGIMN	灰黄色	B	底部25%	未野産
11号墳	7	須恵器 坏	-	(1.9)	(7.0)	BGHIJN	灰白色	B	底部25%	未野産
11号墳	8	須恵器 埴	-	(1.1)	6.3	EGHIMN	明黄褐色	B	高台部	未野産
11号墳	9	須恵器 埴	-	(2.5)	-	ABGHJN	灰色	A	高台部	未野産 高台径7.1cm
11号墳	10	須恵器 埴	-	(2.2)	(6.8)	BGHIN	灰白色	A	高台部	未野産
11号墳	11	須恵器 埴	-	(2.3)	(7.0)	BEGHIJN	灰黄色	C	底部50%	未野産 高台部破損
11号墳	12	須恵器 高台皿	-	(2.4)		BEGHIMN	灰黄色	B	高台部片	未野産 高台部7.0cm
11号墳	13	灰釉陶器 高台皿	-	(1.4)		BHN	灰白色	B	高台部片	底部外面墨書「西」 底部内面釉薬(一部)
11号墳	14	須恵器 短頸壺	(26.0)	(2.1)	-	ABGJN	黄灰色	A	口縁部片	未野産
11号墳	15	須恵器 長頸瓶	-	-	-	ABGMN	灰色	A	頸部片	未野産
11号墳	16	須恵器 長頸瓶	-	(5.7)	-	ABEG	灰白色	A	胴部20%	未野産
11号墳	17	須恵器 甕	-	-	-	ABGHMN	灰色	A	肩部片	未野産
11号墳	18	須恵器 甕	-	-	-	ABGHM	灰色	A	胴部片	未野産
11号墳	19	須恵器 甕	-	-	-	ABGHIN	灰色	A	胴部片	未野産
11号墳	20	須恵器 甕	-	(7.2)	(20.0)	ADGI	灰黄色	B	胴～底部片	未野産 底部外面 静止糸きり
11号墳	21	土師器 甕	(12.8)	-	-	ABHK	にぶい赤褐色	A	口縁部15%	
11号墳	22	土師器 甕	(17.2)	-	-	ABHKM	橙色	A	口縁部15%	
11号墳	23	土師器 甕	(20.0)	-	-	ABHK	にぶい赤褐色	A	口縁部10%	
11号墳	24	土師器 甕	(17.4)	-	-	ABHK	赤褐色	A	口縁部10%	
11号墳	25	土師器 甕	(14.8)	-	-	ABHK	明赤褐色	A	口縁部13%	
11号墳	26	土師器 台付甕	-	-	-	AEHK	橙色	A	底～脚部片	底部から脚部にかけての破片
11号墳	27	土師器 台付甕	-	-	-	ABEHK	明赤褐色	B	底～脚部片	
11号墳	28	紡錘車 弾車	残存径5.3cm、厚さ3.5～4.0cm							
11号墳	29	紡錘車 弾車軸	残存径1.5cm、厚さ0.6～0.8cm							
11号墳	30	刀子	残存径4.4cm、厚さ0.3～0.6cm							
1号溝跡	1	須恵器 坏	(12.0)	3.5	(8.0)	ABGHMN	青灰色	A	30%	未野産
1号溝跡	2	須恵器 皿	(16.0)	2.5	(7.2)	CDEGIJN	黄橙色	B	50%	底部回転糸切り後、粘土貼付けナデ調整。
1号溝跡	3	須恵器 皿	(13.0)	1.8	(6.0)	DEGHJN	灰黄色	B	口～底部片	未野産
1号溝跡	4	須恵器 甕	(18.0)	(5.5)	-	AGHN	灰色	A	口～頸部片	未野産
2号溝跡	1	須恵器 坏	(12.0)	(2.9)	-	ABGHN	灰色	A	口縁部片	未野産
2号溝跡	2	須恵器 坏	-	(1.5)	(6.2)	ACDGHJN	灰黄色	B	底部70%	未野産
2号溝跡	3	須恵器 坏	-	(2.7)	(6.0)	AGMN	灰色	A	体～底部片	体部下端横位ヘラケズリ
2号溝跡	4	須恵器 坏	-	(2.6)	(6.0)	BGHMN	灰色	A	体～底部片	未野産
2号溝跡	5	須恵器 皿	(16.0)	(15.0)	-	ABDGHIN	暗灰黄色	B	口縁部片	未野産
4号土坑	1	須恵器 坏	(15.0)	(2.6)	-	AFGHN	灰白色	B	口縁部片	未野産
10号土坑	1	須恵器 甕	-	-	-	ABEGHN	灰色	A	胴部片	未野産
12号土坑	1	須恵器 高台皿	-	(2.9)		ABDEGHIN	明赤褐色	B	90%	底部外面「西」墨書 高台径7.4cm
15号土坑	1	石器								
15号土坑	2	石器								
16号土坑	1	須恵器 坏	-	-	8.6	ABDN	浅黄色		20%	未野産
遺構外	1	須恵器 坏	(14.0)	(2.8)	-	ADGIN	褐灰色	A	口縁部片	器厚薄手
遺構外	2	須恵器 坏	(12.0)	(2.8)	-	ABDGHJN	浅黄色	B	口縁部片	未野産
遺構外	3	須恵器 坏	-	-	-	AGIN	黄褐色	B	体部片	体部外面 墨書「上」字体不明
遺構外	4	須恵器 坏	-	(1.8)	(7.0)	AGHIMN	灰色	A	50%	未野産
遺構外	5	須恵器 坏	-	(1.5)	(8.0)	ABGHN	灰色	A	底部25%	未野産
遺構外	6	須恵器 坏	-	(1.6)	(6.0)	ABDGIN	黄灰色	A	底部25%	未野産
遺構外	7	須恵器 坏	-	(1.7)	(6.0)	AGHN	灰色	A	底部20%	未野産
遺構外	8	須恵器 埴	-	(1.8)	(8.0)	BEGJN	灰黄色	B	高台部25%	未野産
遺構外	9	須恵器 高台皿	(13.0)	2.4		ABDEGHIN	橙色	B	70%	未野産 高台径7.0cm
遺構外	10	須恵器 蓋	鈕径3.8cm、鈕高0.9cm			ABGILN	褐灰色	A	天井部50%	未野産 鈕部は完形
遺構外	11	須恵器 甕	(40.0)	(6.0)	-	ABDGHJN	灰色	B	口縁部片	未野産
遺構外	12	須恵器 甕	-	-	-	AEGN	灰色	A	口縁部片	未野産
遺構外	13	須恵器 甕	-	-	-	ABDGHN	灰オリーブ色	A	体部片	未野産
遺構外	14	須恵器 甕	-	-	-	ABGHLN	灰色	A	体部片	未野産
遺構外	15	土錘	最大長(2.3)cm、最大径0.7cm、孔径0.2cm、両端欠							
遺構外	16	瓦質土器 甕	-	-	-	BDIJ	褐灰色	B	体部片	

V 調査のまとめ

本遺跡・本古墳群は6次にわたる調査がなされており、旧石器時代から中・近世までの複合遺跡であることが確認されている。

今回の調査において、籠原裏遺跡に係る遺構は、住居跡の検出は1軒だけであり、その他は溝・土坑・ピットと集落の性格を論じるには資料に乏しい。また、遺物の出土量もあまり多くはないため、過去の調査に加えての新たな要素を見出すことは難しい。時期的には9世紀代に帰属するものが多く、特に後半以降に集中する傾向が見られた。過去の調査はいずれの場合も籠原裏遺跡にかかる遺構・遺物は9世紀後半～10世紀初頭に帰属するものが多く、今回の調査もまた同様である。必然的に本遺跡は当該期に営みの中心があると考えられるだろう。その他の時期では、縄文時代中期の土器片を検出したが、これも過去の調査結果の枠を出ない。時期的な部分以外では、過去の調査で確認された墨書「西」が書かれた土器の検出や、皿を比較的多く検出することが、本遺跡における一つの傾向といえるだろう。墨書「西」は、西別府祭祀遺跡でも確認されており、両遺跡の関連性が示唆される。

籠原裏古墳群については、新たな第11号墳の確認が成果といえる。所在は、現在までに確認されている古墳群の東端に位置する。これは本古墳群がさらに広がる可能性を示している。本墳について石室を一部検出している。形状は河原石の平積みの中張り型と推定され、本古墳群の古墳の石室と同様である。周溝については形状が不明瞭であり、はっきりとした規格性が見られなかった。葺石については、河原石により廻っており、整然と整列している。ただ残念なことに、後世の攪乱を一部受けており、古墳としての形状がはっきりしなかった。これは、本古墳群から八角形墳が確認されており、本墳においてもその可能性が無視できなかったことから、明確にしておきたい点であった。本墳に伴う遺物は検出できなかったが、形状からは、終末期の群集墳であるといえるだろう。また、本墳にかかる攪乱は全て近代以降のものであり、籠原裏遺跡にかかる遺構は重複していない。つまり、古墳が存在する状況の中、集落が所在するという原景が想定される。このことも過去の調査結果と一致する。本古墳群については、被葬者が不明であるが、7世紀後半から8世紀初頭までの古墳が主体を占めることと、7世紀末頃から正倉が成立したと推定される幡羅遺跡と時期的に一致する点が興味深い。

今回の調査は今までの調査の成果を再確認し、資料的価値を裏付けたものといえる。当地区は区画整理事業が進行しており、埋蔵文化財包蔵地表面層は広範囲にわたって攪乱を受けている。しかし、河川の氾濫土により、遺跡面上層に厚い保護層が設けられていることから、保存状態が良好な遺跡である。特に本古墳群については、官衙である幡羅遺跡との関連性が考えられることもあり、良好な保存状態での検出を期待できることから、地域の歴史解明のための資料として今後の成果に期待したい。

引用・参考文献

紙数の都合により主要な文献のみ掲載した。

- | | | |
|-------------|------|--------------|
| 熊谷市籠原裏遺跡調査会 | 2000 | 『籠原裏古墳群10号墳』 |
| 熊谷市教育委員会 | 2000 | 『西別府祭祀遺跡』 |
| | 2004 | 『籠原裏遺跡』 |
| 深谷市教育委員会 | 2007 | 『幡羅遺跡Ⅱ』 |
| | 2008 | 『幡羅遺跡Ⅲ』 |

写 真 图 版



籠原裏遺跡全景（西から）

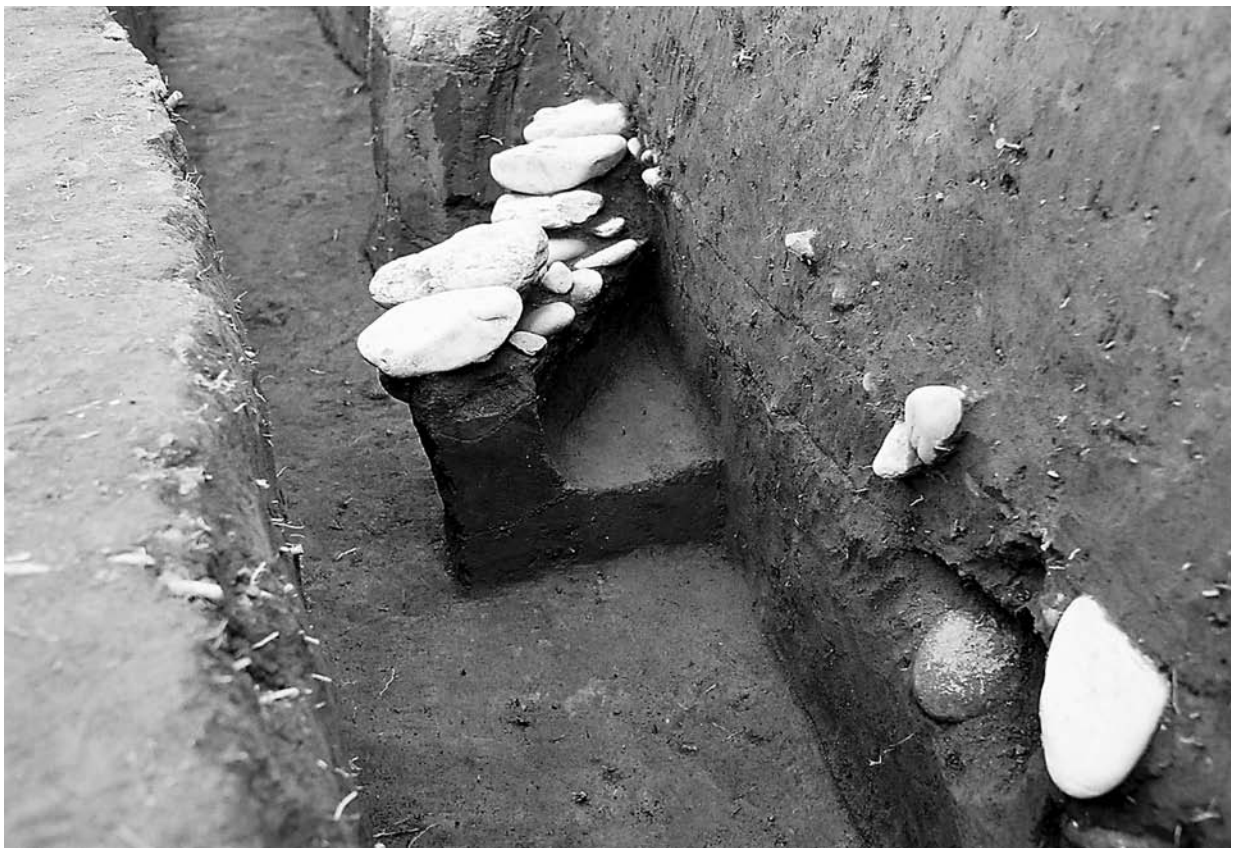


第11号墳（南から）

図版 2



石室検出状況（南から）



石室断割り状況（南から）



第 1 号住居跡・第 17 号土坑



第 2 号溝跡



第 1 号溝跡



第 18 号土坑



第 15 号土坑



第 1 号土坑・第 6 号土坑



第 9 号土坑

図版 4



第11図 第11号墳周辺 9



第11図 第11号墳周辺10



第11図 第11号墳周辺12



第11図 第1号溝跡 1



第11図 第1号溝跡 2



第7図 第1号住居跡 1



第12図 遺構外出土 9



第12図 遺構外出土10



第11図 第11号墳周辺14 ~ 20・第12図 遺構外出土11 ~ 14



第11図 第11号墳周辺21 ~ 25



第11図
第11号墳周辺26



第11図
第11号墳周辺27



第11図 第11号墳周辺13



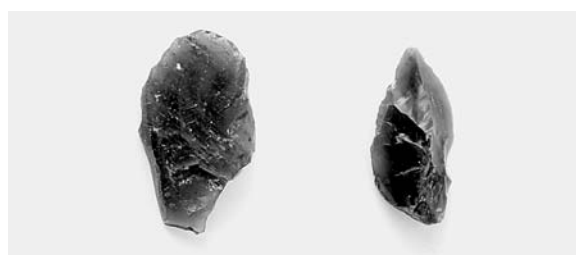
第12図 第12号土坑 1



左から 第12図 遺構外出土 3 ・ 第11図 第11号墳周辺13 ・ 第12図 第12号土坑 1



第11図 第11号墳周辺28、29



第12図 第15号土坑 1、2

報 告 書 抄 録

ふ り が な	かごはらうらいせき かごはらうらこふんぐんだいじゅういちごうふん								
書 名	籠原裏遺跡 籠原裏古墳群第11号墳								
副 書 名	熊谷市籠原裏遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書								
巻 次	—								
シリーズ名	—								
シリーズ番号	—								
編 集 者 名	蔵持 俊輔								
編 集 機 関	埼玉県熊谷市籠原裏遺跡調査会								
所 在 地	〒360－8601 熊谷市宮町 2 -47- 1 TEL 048-524-1111								
発行年月日	西暦2009（平成21）年 3 月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コード 市町村 遺跡番号		北緯 (° ´ ¨)	東経 (° ´ ¨)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
かごはらうらいせき 籠原裏遺跡	くまがやしおおあぎにいぼり 熊谷市大字新堀353-1他		11202	059-082	36° 10´ 32¨	139° 20´ 04¨	20080519 ～ 20080620	330	共同住宅 建設工事
かごはらうらこふんぐん 籠原裏古墳群 第11号墳	くまがやしおおあぎにいぼり 熊谷市大字新堀353-1			059 -051-11					
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特 記 事 項		
籠原裏遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代	住居跡 溝跡 土坑	1 軒 1 条 7 基	土器・石器 土師器・須恵器 灰釉陶器 土製品・鉄製品				
		中・近世	—		在地系土器				
		時期不明	溝跡 土坑	1 条 11基					
籠原裏古墳群 第11号墳	古墳	古墳時代	墳丘 周溝	1 基 1 条					

熊谷市籠原裏遺跡調査会埋蔵文化財発掘調査報告書

籠原裏遺跡・籠原裏古墳群第11号墳

平成21年3月31日発行

発行／埼玉県熊谷市籠原裏遺跡調査会

印刷／大屋印刷株式会社